

論文

観光における「ものがたり」の研究

橋本和也

はじめに：「観光のナラティブ」とは

観光におけるナラティブ研究とは、筋のある「ストーリー作品」だけを対象とするものではなく、観光に関わるすべての人間や非-人間のものがたりがいかに「語り／語られ」るかに焦点を当てる研究であるということが出来る。文化人類学におけるナラティブ研究では、書き言葉や話し言葉を含め、研究対象とする文化のメンバーとしての「イーミックな」視点から、物事に関する価値判断が反映し、織り込まれた話者の思いをその「語り方」に読み取ることに焦点が当てられてきた。無文字社会の口頭伝承で扱われてきた神話・伝説・昔話や、ライフヒストリー研究における「体験談」などが代表的なものである。このとき注意すべきことは、松木啓子も言うように「個人的体験談 (personal experience narrative) をはじめ多くのナラティブが単なる過去の体験の報告ではなく、過去の記憶や語り手のアイデンティティの意味を可変的な現在において絶えず構築し続ける場であるという視点」(松木 2002:138) である。ナラティブによって再現される記憶やアイデンティティの意味は「錯綜する社会的、政治的諸関係のただ中にあり、そのような緊張関係がどのようにナラティブにテキスト化されているのか」がポイントとなり、「歴史や主体、アイデンティティなどの構築、脱構築、再構築の具体的な意味生成の場 (locus) の一つ」として解明されてきたと松木は指摘する(松木 2002:139)。本論ではティム・

インゴルド (Ingold 2016) のいう「徒歩旅行者」(狩人) がたどる「ライン」に注目する。「住まう者」の足跡には生活者の「ものがたり」が編み込まれ・刻み込まれており、それをたどる「徒歩旅行者」の「ライン」が交わるところに「旅／観光のものがたり」は生成する。地域の「生活者」のライン(足跡)と「徒歩旅行者」(または狩人) がたどるラインが交わるところに生成する今日の「旅／観光」を読み解き、それぞれのラインをたどる「旅／観光」のハイブリッドな経験がいかに「語り／語られ」るかを本論では明らかにしていく。

1. 観光の「ものがたり」とみやげもの

みやげものには観光者の観光経験が反映し、その経験を「ものがたる」ことができるかどうかを選択の基準になる。観光経験をものがたるものは小石でも貴重なみやげものとなる。特産品のすだち汁の瓶詰やイノシシカレーなどは、地域についての「ものがたり」を語る。朝市などで店主や生産者との交流が実現すれば、畑のことや料理方法などの話、場合によっては生活の様子や昔話までが語られ、その品物は忘れたいものになる。モノは消費され消失しても、その光景ややりとりは思い出され、語られる(橋本 2011:75-76)。ひとつのみやげものをめぐってどれだけの「ものがたり」が生成するかは、観光者の購入時の状況、現地の人々との交流などにかかってくる。また、観光者の内的なもの

がたりが想起されるか、これまでのコレクションの一部としての意味をもつかなどもみやげものの重要な要素となる。観光経験についてのものがたりは、語り手の「現在」によって変化し、時とともに再編成されるのである。みやげものを介して観光経験が「語られる」時には現時点の自己が語られ、過去の観光経験はつねに再編成されるのである（橋本 2011:77-78）。

ここで「よく知られたものを確認」するだけの大衆観光者のみやげものについて考えてみよう。観光者は出発する前に自分なりの「観光のものがたり」を構築し、それなりの観光経験についてのイメージを抱いている。店に並ぶ手ごろな品物がその時の気分にあっているか、興味を引くものかどうかなどによって、観光経験は左右される。他の観光者と同じように振る舞いなんとなく通り過ぎるだけの大衆観光者にとって、自らの経験を「観光」と名付けるよすがとなり、記憶として残す装置となるのがみやげものである。その地を記憶づけるための装置として、その時「ささやかな魅力」で訴えかけてきた手ごろな値段のみやげものとして、「京都に旅行してきました。ほんの気持ちです」というパイ生地の菓子などのような、「名前入りの箱」が自らのささやかな観光経験を表象し、ものがたるよすがとなる。通過型大衆観光者の観光経験は希薄なために、みやげものがもつとされる喚起力もささやかなのが特徴である（橋本 2011:50）。

2. 枠組み（フレーム）を提供するものがたり

(1) 導きのナラティブ（ものがたり）

何かの事故でもテレビ、新聞や SNS などで連日同じ映像が流され、それにまつわるものがたりが日常の会話で繰り返されると、「よく知られたもの」となる。ガイドや地元の人から有

名なものであるとの情報が与えられれば、それは「よく知られたもの」になり、まなごしが向けられる対象となる。観光は出発前から、そして現地においても、さまざまなものがたりに絡め取られているのである。

『観光と文化』においてエドワード・ブルーナーは「経験はナラティブによって秩序づけられなければ、それ自体不完全な存在である」（ブルーナー 2007:34）という。彼は民族誌家であり、旅行者の求めに応じて団体観光客を世界各地に引率した経験をもつ。タイでガイドとして団体客を小さなボートで引率していたとき、大雨が降った。荒涼とした馴染みのない風景のなか、護衛のためにタイ軍の兵士がライフル銃を抱えて後部座席に座っており、客は心配げで混乱していた。やがて客のひとりが「まるでメコン川を舞台にしたヴェトナム戦争の映画みたいだな」ともらした。この発言がこの移動にフレームを与えることになった。この「導きのナラティブ」によって、客はヴェトナムを搜索するアメリカ兵に「変容」したという（ブルーナー 2007:34）。たとえ実際に経験していることでも、ナラティブの導きがなければそれがどのような経験であるのか名付けることができない。ナラティブによって経験は意味を獲得することができ、語るに相応しい経験となるのである（橋本 2011:90）。

(2) 観光のナラティブ（ものがたり）

「観光」はそれ自体で意味を与える文脈になる。観光者は自分の経験に「観光」というラベルを貼り、訪問した場所を観光地として構成する。ある経験を「観光の経験」にする枠組みがメタ・ナラティブである（ブルーナー 2007:35）。ある踊りを見て、民俗芸能でも民族の踊りでもなく「観光ダンスを見た」というとき、その踊りは「観光」の枠組みに入れられるので

ある(橋本 2011:92)。第三世界でのツアーでは、観光者をエリート(特権階級)とするナラティブが有力となり、ものがたりは「意味の構造だけでなく、力の構造」(ブルーナー 2007:36)ともなることを実感する。裕福で高齢の白人観光者が若くて貧しい有色の人びとを見るときに、不平等な力関係・新植民地主義、及びエリート意識に関するナラティブが出現し、観光者は観光の場でそれを強化する。また消えつつある野生についてのノスタルジアに関しても、「真正なる未開文化」が近代化に蝕まれつつあるというナラティブが生起する。

大衆観光の一連の過程では、観光者の対象についての出発前の認識が、途中では確認・強化されるだけであり、終了後は出発前の認識を追認して終わると、筆者は指摘してきた(橋本 2011:93)。観光で語られる内容は出発前にあらかじめ提供されたものがたりをなぞるだけであり、観光中のまなごしも既に設定された枠組みのなかでしか焦点を結ばない。語りにはスタイルがあり、語り手はそのスタイルを踏襲する。大衆観光者が現地の人々や、現地の生活・文化・環境の中から新たに「何かを発見すること」を期待することは困難である。「語るように」または「語られたように」モノを見ること、そしてあらかじめ与えられた情報に示されたように見ることが大衆観光の基本的特徴である。このような指摘は、ブルーナーのいう観光におけるナラティブの限定性に通じる。それは「時代遅れのものがたりを繰り返し、ステレオタイプを再生産し、幻想を複製し、破棄された歴史観を刺激する」(ブルーナー 2007:36)という発言のなかにも見られる。出発前に目的地についての記述・広告・写真などで、商品が提示される。そこには「愛と哀しみの果て」「野生の王国」「アフリカの女王」など、ナショナル・ジオグラフィックをはじめとする熟達したメディアが提

供する大衆文化的イメージがある。ブルーナーは「観光は、新しいナラティブを発明するにはそれほど革新的ではないが、しかし、古い話を語るための新しい場所」を提供するものであるという(ブルーナー 2007:37)。それらのものがたりは大衆観光者／消費者が喜んで買いたいものであるが、それらからは実に沢山の地域文化が漏れ落ちているのが現実である。通り過ぎるだけの大衆観光者ではなく、次に述べるような地域の人びととの交流を通して地域文化を「発見」し、ともに味わう「地域文化観光者(旅人／観光者)」が望まれているのである。この「地域文化観光者」については3(1)で説明する。

(3)「発見」のものがたりをめぐって

ブルーナーは観光中にもものがたり(ナラティブ)が修正され、個人化し、終了後には観光経験としてより一貫したものとなるという。しかしその修正と統合化は、最初に設定された枠組みのなかだけで行われる。事前のものがたりと相容れない出来事に遭遇した場合、観光の枠組みでは「失敗」となる可能性が高い。しかし民族誌家や人類学者のフィールドワークでは、むしろそれは貴重な「発見」の機会であり、望ましい経験となる。ガイドは「導きのものがたり」、すなわち観光者の経験に意味を与える「観光の枠組み」を提供する役割をもつ。観光者は旅行中に事前には予想しなかった出来事にたびたび出会う。場合によってはガイドも予期できない突然の事故に遭遇することもある。ある出来事を単なる事故で終わらせるか、貴重な経験とすることができるかは、「導きのものがたり」の有無にかかっている。それを提供するのがガイドの役割であるが、場合によってはガイドの能力を超える出来事もある。事前のものがたりと相容れない、それを圧倒するような出来事が生じたとき、全体を再編成して解釈の枠組みを提

供するものは、経験者自身が時間の経過とともに自らの実存（生き方）と照らし合わせて再構築する新たなものがたりである（橋本 2011:94-95）。これはもはや「よく知られたものの確認をする」だけの大衆観光の枠組みを超えた領域、「発見」ともなう「地域文化観光」やさらには「実存的な旅」の領域に入る経験となる。

3. 「ものがたり」をたどる ——「ライン」をたどり「歩く旅」

「歩くこと」が知る方法となる。「歩くこと」は人間や非-人間の足跡をたどり、それをものがたりとして読み取ることになる。歩く方法はそれ自身が考え・感じる方法であると、インゴルドは主張する。それを通した歩行者の動きの実践において、これらの文化的な形は絶えず生成されるのである（Ingold 2016:2）。インゴルドは、点と点を結ぶだけの「運搬」（transport）のための移動ではなく、「線にそって」動く「徒歩旅行」（wayfaring）に焦点を当てる。大衆観光者は「よく知られたものを確認」するために日常的な場所から別の場所へ、点から点へ移動する。「よく知られているものを確認」するためだけの移動では、「発見」や観光者の「変化／成長」は期待できない。それに対して、「ラインにそって」動く「徒歩旅行者」は、道中での出会いや発見に重きをおく。このような移動を日本では「旅」の領域にいれ、「観光」とは異なるものとして概念化している。旅は「成長／生成変化」を前提に語られる。大衆観光者は「ものの来歴」を「尋ね／訪ね」て「発見」することはない。インゴルドの「狩人／徒歩旅行者」の概念を媒介に、「旅人／観光者」のハイブリッドについて考える。

(1) 「徒歩旅行者」：「旅人／観光者」というハイブリッド

インゴルドの「狩人」は、獲物の道をたどって、あらゆる獲物の「来歴／生き様」を追跡・追想する。旅人もまた道にそって思いをめぐらし、道に刻まれた地域の人びとの生きるありさまを体感し、感取する。これは旅人の「歩きたた」であった。しかし現代の多くの人々は余暇と労働の繰り返しを余儀なくされ、つねに「旅にある」ことは不可能であるがゆえに、現実の場面では「観光」と「旅」のハイブリッドを引き受け「旅／観光」という新たな形態を模索することになるのである。本論ではこの新たな「旅／観光」というハイブリッドを実践するのが「地域文化観光者」であると考えている。

インゴルドのいう「徒歩旅行者」の代表的な例が「狩人」である。ロシア極東サハリンに住むオロチョン族は飼いならしたトナカイに鞍（くら）をつけて乗り、トナカイ狩りに出かける（Kwon 1998:118）。彼らは「腸のように曲がりくねり、いたるところで鋭角に折れ曲がり迂回」する道をたどる。狩人は、道筋にそって広がる風景とあたりに住む動物たちに絶えず注意を払い、あちこちで獲物を仕留める。獲物は置き去りにし、あとでキャンプ地に戻りながら回収し、その屠殺体を換金場所へとまっすぐに橇（そり）で運ぶ。その橇道は「ほぼ一直線であり、キャンプと目的地の最短距離を結んでいる」（インゴルド 2014:127-128）。徒歩旅行者は、「道にそって」現れる環境を知覚によって監視し、それに自らの動きを絶えず反応させる。前進しながら凝視し、耳を澄ませ、肌で感じ、その振る舞いを周囲に合わせよと促しつづける無数のわずかな合図にも敏感になる。トナカイという動物、さらにオートバイやスノーモービルといった機械の力を借りても、彼ら狩人は徒歩旅行者である。そして、本論の「観光者／旅人」

というハイブリッドは、生活を営む「徒歩旅行者」の生活世界のあり様と「歩き」を注意深く観察すべき者となるのである（橋本 2022:5-6）。

(2) 生の踏み跡:ラインと網細工(メッシュワーク)をたどる徒歩旅行者

インゴルド&フェルグンスト編の *Ways of Walking* (2016) は、「歩くこと」をラインと網細工の比喩を使って記述した民族誌の新たな試みである。インゴルドは「野生動物あるいは家畜が残す網状の型、または村や小都市の家屋の中、その周囲・近郊であれ、人々が残す網状の型は、建築的というよりもむしろ「原一織物的」な環境を作り上げる」と徒歩旅行の型を説明する（インゴルド, 2016, p.132）。ペルー・アンデスのチチカカ湖周辺では、ラインのほとんどは1メートルほどの幅で動物・男・女・子供の足で踏みつけられ踏み固められているが、いくつかのラインはツルハシやシャベルを用いて作業する村人たちによって実際に地面に引かれている（Orlove 2002:210）。現代的な意味では、編み目のラインは点を結び合わせたもので連結器となるが、ベンジャミン・オルロヴが描写するラインは、交差しあう路線のネットワークというよりも折り合わされた踏み跡で網細工(メッシュワーク)のラインとなっており、それに沿って生活が営まれる踏み跡である。メッシュワークが形成されるのはラインの絡み合いにおいてであって、点の連結においてではない（インゴルド 2014:133）。

「徒歩旅行」は、人間であれ動物であれ、すべての生き物が地球に居住するためのもっとも基本的な様式である。居住 (habitation) とはそこに住むためにやってくる人間集団があらかじめ用意された世界のある場所を占拠する行為ではなく、「住まう者/居住者」が、世界の連続的生成プロセスそのものにもぐりこみ、生の

踏み跡をしるすことによって世界を織りだし組織することである。そしてそのラインはたいてい曲がりくねり不規則であるが、全体が絡み合って緊密な織物となるのである（インゴルド 2014:133）。その曲がりくねり不規則で全体が絡みあった織物としてのものがたりをたどるのが、「徒歩旅行者」であり「旅人」であるということになる（橋本 2022:66）。

(3) 「住まう者」にとっての知:「ものがたり」をたどる「地域文化観光者」

「住まう者」にとって知がどのように形成されるかに注目する必要がある。マレーシアのパテックでは子供の教育で規律を教え込むことはなく、森に放って後ろからついていく。道をたどりながら知は形成され、歩くという動きが知る方法となるのである（Tuck-Po 2016）。またカナダ北部のチチョ（またはドグリブ）では成人は何にでも昔にさかのぼるものがたりを見つけ、その意味の説明が可能な自身の経験を拡張し潤色する（Legat 2016）。子供はそのものがたりを聞いて成長するが、語りには教訓的なお説教の目的はなく、メッセージ性は付与されていない。先行者は後継者が追えるように足跡を残すのである（Ingold 2016:5-6）。先のパテックでは危険な森をどう歩くか、森との交渉の仕方の子供に訓練する。先頭は弱者で、後ろは護衛が歩く。彼らにとって歩くことは人生を生きることであり、迷子になることは死ぬ（出発点に戻れない）ことである。何が恐怖であるかという、道に迷うこと、人を狩るジャガーに遭遇することであり、いかに恐怖が森歩きに影響を与えるかを学んでいく（Tuck-Po 2016:29-30）。

北ナムビアの狩猟採集民アコー・ハイ・オムにとって、この土地の人間と非-人間の足跡は、その土地のローカルな資産である。彼らの足跡

は世界内を歩くことによって、すなわち土地の表面を踏む（スタンプとしてたんに上に押す）のではなく、刻み込む（impression）ことによって形成される（Ingold 2016:7-8）。カナダ北部のチチョでは、先人の足跡を踏みたどることで、そこに自分の足跡を混入させて共存の関係をうちたてる。知識・足跡は対立せず、住まう者の足跡が記憶の足跡となる。知識と足跡の関係は、身体的動きとその刻み込み（足跡）に等しく、知識と足跡が同等ならば知識は「行う」ことであり、「行う」ことは仕事を達成することとなる。「住まう者／生活者」の歩く道はフラットではなく、織物のように織りこまれた大地であり、トリップ、スリップをし、大地の表面と交渉するのである。ケネス・オルウィグは住まう者のランドスケープはパフォーマンスをする舞台ではなく、住まう者自身の生活が編み込まれるタペストリーと比較されるべきであるという（Olwig 2016:88）。足跡は織物の部分なのである（Ingold 2016:7-8）。

ラインをたどる「ものがたり」が、「旅」となる。それぞれの「ものがたり」が交わる場所に「旅」が生成する。マレーシアのパテックの子供と同じように道をたどりながら知が形成される（橋本 2022:66）。歩くことは知に従属するのではなく、歩くという動きが知る方法となる。そしてカナダのチチョの成人のように、何にでも昔にたどるものがたりを見つけ、その意味の説明が可能な自身の経験を拡張し潤色するのである。子供はそのものがたりを聞いて成長する。先行者は後継者が追えるように足跡を残し、ものがたりを聞いた「旅人」、そして今日の「旅人／観光者」（地域文化観光者）は自分なりの理解を育くむのである（橋本 2022:143-144）。

4. ものがたりをたどる旅

2003年から湯布院・内子・遠野をはじめとして、さまざまな地域を訪ね、「観光まちづくり」活動についての話をうかがった。有志グループ形成の様子、人間関係の維持の仕方、アイデアの実現方法、行政の巻き込み方など、それぞれの地域にあった独自の方法を模索・考案していることを実感した。皆好きだから友として集まり、楽しいから他を動かし、面白いから知恵を出し、その結果自分たちなりの目標を実現してきたという点が共通していた。その人々の充実した「導きのものがたり」を頼りにゆかりの場所を歩いた。「まちづくりのものがたり」を歩く「旅」となった。ここでは「語りの里・遠野」を事例として「地域文化観光（旅／観光）」について考える。

(1) 語りの里という枠組み：遠野

2003年に人口2万8000人、観光者が年に160万人ほど訪れる遠野市を訪問した。遠野には地域の人々を引きつけ、ともに働きたいと思わせるリーダーが何人もいる。彼らの語りからは、ヒトに感銘を与えるアイデアを創案しつづけてきた様子がうかがえた。遠野のまちで聞いたそれらの感銘深いものがたりを歩いた。1900年に出版された柳田国男の『遠野物語』は地元では家に付属するごく「当たり前の話」にすぎなかったが、外から注目されることになった。しかしザシキワラシがいて栄えた家も、ザシキワラシが離れて没落した家も、地元では「むかしむかしあるところ」という匿名の世界ではなかった。どの家か特定できるので『遠野物語』の扱いには慎重にならざるを得なかったという（橋本 2022:111）。

川森博司は、いまや昔ながらのいりり端はなくなり、祖父母が孫に昔話を語る機会もなくな

り、観光者相手に語る新たなスタイルが創出されているという。昔話のプロの語り部は、語り部ホールで不特定多数の観光者相手に決められた時間内での上演をしている（川森 2001:79）。上演中に、観光バスの出発時間がやってくるので「20分で終わる話をしてください」との注文が出される光景を目にした。大衆観光者相手では時間のかかる長い話は敬遠され、よく知られた適当な長さの話が繰り返されている現状がある。しかし、旅人ほどには心の赴くままに時間を使うことはできなくとも、地域の人々の足跡をたどることに意識的な「旅人／観光者」ならば、ボランティアの語り部が詰めている「語り部のいるお休み処」という看板を JR 遠野駅の観光案内所で見つけ、「寄って行ってがんせ昔話 語るから聞いて行ってがんせ」という案内に導かれて、長い話をゆっくりと聞くことができる。カルチャーセンターで語りを習った人々がそこで観光者相手に無料で話を聞かせていた（橋本 2022:111）。

遠野では現在でも感動的な「ものがたり」が生成されている。畑のまわりが開発されて木陰がなくなり、トイレに関して特に女性たちが困っていた。そこで畑の真ん中にトイレを作るように市に要求し実現させた農家の主婦たちがいる。全国でも珍しい畑の真ん中の公衆トイレが道の駅「風の丘」近くにあった。また「風の丘」に5坪の建物を借りて地元の女性たちが店を開き、いまでは年に五千万円以上を稼いでいるという。前の晩に準備をし、農家もやり、三時間しか寝ないで働いているが、面白いといっている。初年度の年末に三千万円という予想以上の売り上げを達成した祝いをするようになった。近くの温泉に行って骨休めをする訳でもなく、「風の丘」のレストランに家族みんなを招待し、自分たちで作ったユニフォームを着て接待したという。「家族のおかげで外での仕事が

できるから、家族のためにパーティを開催した」という話を、遠野の観光まちづくりを先導した人から聞いた。その「まちづくりのものがたり」に導かれて、畑のなかの公衆トイレや小さな店をめぐり歩いた。

遠野のまちなかでは背からオシラサマの首が飛び出しているベンチや河童の形をした駅前交番の建物に出会い、さまざまなものがたりに導かれて河童の淵や「とおの昔話村」「伝承園」などを歩く経験をした。いわば、人々から聞く話がみな「むかしばなし」のように聞こえるのが遠野であった。カナダ北部チチョの語らずにはいられない成人のように、なんにでも昔に遡るものがたりを見つけ、その意味の説明が可能な自身の経験を拡張し潤色する。子どもは毎日そのものがたりに聞いて成長する。先行者は後継者が追えるように、足跡を残す。先人の足跡を踏みたどり、そこに自分の足跡を混入させて、共存の関係をうちたてる。そして、「旅人／観光者」の私は「まちづくり」の「ものがたり」を「あるく」のであった。

(2) 人間と非一人間が《ともに》形成する「ものがたり」を歩くこと

近年の大衆観光の市場では、観光資源は「ストーリー付与＝意味付け」次第で価値が出るといわれている。すなわちストーリーが受け入れられ、「よく知られたもの」になれば、それを確認しようとする大衆観光者の関心を集め、ヒット商品となる。しかしそれは「地域文化観光論」の視点からは「地域文化資源」の疎外というリスクを出現させる状況となる。地域が発見・創造したものに大都市の消費者が喰いつくような「ストーリー付与」をすれば観光商品として大ヒットすることもあるが、この商品化の過程で「意味・ストーリー」は単純化され消費しやすいものに変容する。「そと」の資本はこ

のように単純化された「分かりやすい言葉」を遣い、大衆観光者に受け入れやすいものにして拡散し、一時的な「価値」をさらに増大して大量消費品となることを目指すが、すぐに飽きられ、短期的利益追求の対象で終わってしまう。地域の素材を使って外部資本が作り上げた「ストーリー付与＝意味付け」は、地域を離れた実体のないイメージとして「そと」で大量消費され、地域にはなにももたらされない事例も多い(橋本 2022:261)。

「地域文化観光」とは、「地域の人びとが、地域で発見・創造した地域の文化資源を、育て上げて、発信する観光」である。今回のコロナ禍を機に、「地域文化観光」を地域の人びとの「つながり」を基に、「地のもの／非－人間」(動物・霊的存在・災いを引き起こす海・山・川などの自然、コロナウイルスなど)をも含んだ「つながり」のあり方として、鍛え直す必要性を感じた。「地のもの」の一員である人間は、「地のもの」の気配を感じ取り、対応・交渉し、生活世界を維持する。コロナ感染症最盛期には、とりあえずの近代的／合理的な対応が優勢となり、マスクをかけ、消毒し、身体的距離を保ち、換気を心がけた。しかし、次第に「普通の生活者／観光者」たちは地域での「井戸端会議」の代わりにオンラインでの雑談や飲み会を開くなど生活に根差した民俗的な知恵を使い、リスクを減じながら、仲間との「密接／親密」なおしゃべりや世間話・雑談と「外への移動／観光」を可能にする対処法を工夫するようになった。普通の生活者にとっての「観光的なるもの」の重要性は、外に「移動し／歩き」、仲間と会い、雑談・世間話の楽しみを享受することにある。緊急事態宣言下の状況においてこそ、事態にしっかりと対峙し、普通の生活者／観光者の生活世界を見極め、カッパやザシキワラシなどの霊的存在のみならずコロナウイルスなど《とと

もにある》「民俗的観光観」に基づいた「生活必需品」としての観光を案出する「ものがたり」が求められていたのであった(橋本 2022:262-263)。

「地域文化観光(旅／観光)」にとっての「ものがたり」とは、地域の人びとと《とととも》に生成される「ものがたり」を、地域の人びとの足跡《とととも》「地域文化観光者(旅人／観光者)」が「歩く」ものであることが明らかになった。次に、具体的な事例から「ものがたり観光」のあり方について考えてみることにしよう。

5. これも「ものがたり観光」:2018年度「久留米まち旅博覧会」

2018年11月中旬に「久留米まち旅博覧会」を企画・運営している方々を訪問した。久留米駅前ではからくり儀右衛門の時計と青木繁の「海の幸」のレプリカが迎えた。

(1) 久留米市美術館とけやきの通り

久留米はブリジストンタイヤとアサヒシューズの工場のまちである。石橋正二郎は17歳で「志まや」を経営し、白足袋の大量生産を始めた。足袋にゴム底をつけて「地下たび」にし、次にゴム靴を製造し、さらにゴム工場を営んでブリジストンタイヤ製造をおこなった。1932年にはフォードなどのタイヤとして採用された。その後履き物とタイヤが分離された。ブリジストン美術館が横山大観の富士山の絵や青木繁の「海の幸」を収蔵しているが、久留米市美術館には久留米に関係がある作品200点を寄贈している。その市美術館の2階ではブリジストンの創業者石橋正二郎の歩みが紹介されている。

ブリジストンの工場近くの「けやき通り」に石橋正二郎がけやきを植樹して100周年になる。通町にギャラリーを開いている「けやきと

アートの散歩路」代表の女性は、英国のコッツウォルを訪ねたとき、100年前の建物が維持されており、家族連れが来て豪華ではないが皆で食事をしている光景をみて感激し、久留米にイギリスがないか考えたという。通町には昔、ハナミズキを植えたことがあったが枯れてしまった。その通町にけやきを植えようと考え、美術館の館長に趣意書を見せ、県の土木事務所・市役所・商工会議所を回って、市役所にけやきを植えてもらったという。まだけやきが木陰をつくるほどではないが、そこでは久留米の「まちづくりのものがたり」を垣間見ることができた。

(2) 青木繁旧居：アートとまちづくり

青木繁旧居保存会と「久留米まち旅博覧会」の会長を兼ねている方は、市の文化部長から依頼を受けて、久留米空襲で残った100年のこの旧家を残すべく保存会を作り、市長や会社の社長を回って2200万円を集めて増改築をおこなったという。2003年に絵の展示なしに無料で開放した。15年後の2018年には12枚の複製を飾っていた。市の指定管理制度で年間いくらかもらい、必要経費を引いて、残った金で複製を作ってきた。石橋美術館と掛け合って、原寸での複製作成の許可をもらった。「朝日」の本物は痛みがあって佐賀県立美術館の収蔵庫に保管されているが、その複製は世界に1枚しかないという。また「海の幸」の銅板レリーフが2014年に3部作られたが、2部は韓国にあり、1部をこの保存会が寄付を受けて展示している。青木繁が育った家という建物だけだった所が、保存会の活動とともに作品の所有権を持つ石橋財団から原寸の複製作成の許可を得、また「朝日」の複製や「海の幸」の銅版レリーフが集まってくるという「ものがたり」が語られる場となっていた。

(3) 「この秋も6章のものがたり」：まち旅博覧会

「物語ある、ほとめきな一日。色も美しまち旅の秋です」と久留米まち旅博覧会は誘う。「ほとめき」とは「もてなし」の意であるとの注が付く。公式サイトでは、「2011年の九州新幹線鹿児島ルート全線開業を前に、市民が手作りの体験型観光商品を開発し、……。久留米に暮らす人々が、普段から慣れ親しんだ地元の地域資源…を活かして、自らが訪れる人をもてなす手作りの旅プラン」であると紹介する。

2017年度の「まち旅博覧会」のパンフレットによれば、「この秋も6章の物語。旅色とりどりの80のまち旅できました」と紹介し、「6つのものがたり」にまとめていた。「出会うは美とその心 芸術のまち旅」「愛しきものづくり 伝統の技のまち旅」「太古から今へ つながりゆく歴史のまち旅」「美味しくて幸せいっぱいな農のまち旅」「地酒に店々の至福の味 グルメなまち旅」「知恵が何より これからも健やかなまち旅」と芸術・伝統の技・歴史・農・グルメ・健康の6分野に分けた80のコースを紹介している。説明の仕方は年度ごとに変わるが、2018年の「美の扉あく特別な一日 技術のまち旅」では、「ウィリアム・モリスと英国の壁紙展」とともに、「あの憧れのスタインウェイピアノ解体新書」と題して、石橋文化センター内文化ホールロビーで料金1000円(入場券付き)で、ピアノの構造について説明する。「田主丸町を見下ろす大塚古墳と平原古墳群をめぐるプログラム」や「豊かな日照時間に恵まれた果樹生産地。その<巨峰ワイナリー>で過ごす秋の一日」とともに、西鉄バスの洗車場が案内されており、「乗り方から洗車の現場まで、プロフェッショナルたちからバスのあれこれ教わったら」と続く。オーソドックスに歴史をたどるコース、葡萄栽培・ワイン製造を見学し食

事までを楽しむグルメコース、日常的なバスの洗車から構造を知る経験までが80のコースには並んでいる。

最小催行人数が10名からで定員が30名の「スタインウェイピアノ解体新書」は千円、「おくんち祭り膳」は定員15名で料金は2千円、「古式藍染めと手織り体験」では大判ハンカチが5千円で定員4名、ワンピースが3万円で定員1名、お昼は持参という。主催者側では、地域の活性化のために昼食を提供できるところと連携してまち旅の企画を考えてほしいとの意向をもっていった。ひとつのまち旅に昼食が付くことで単価が上がり、参加者同士の協働によってまちの人々のつながりが促進される。経済的な利点がなければ企画は継続しない。人々のつながる機会が増え、出会いが多くなれば参加者の楽しさと満足が増すことになる。

この「まち旅博覧会」には、いわば久留米のまちに存在するすべてのモノが、芸術・食品製造・伝統的な技や歴史、さらにはバスの洗車場や、鉄道の線路での枕木の交換体験までが含まれている。「ものがたり」とは、地域にある「すべてのモノ」についてのかたりであり、「ものがたり観光」とはそのすべてのモノの「ものがたり」をたどる「旅／観光（地域文化観光）」であることが明らかになる。

6. 地域芸術祭の「ものがたり」を歩く

道に迷うことは、地域を発見することに通じる。地域芸術祭を歩く経験を思い返すと、作品そのものだけということはない。急な細い道を登り、山が迫る窪みに建てられた古民家や物置小屋の中に作品が置かれているが、作品の印象よりもそこにたどり着くまでの道を歩く経験や、目的地にたどり着けず、または行き過ぎて迷う経験を思い出す。その途中で迷い、不安な

気持ちをもって歩き始めると、「地域を歩く」ことに意識的になり、その場／その環境を「発見」することが可能になる。それは、出発点から目的地への単なる移動ではなく、「徒歩旅行者」の歩く経験となる（橋本 2022:70-71）。インゴルドは、狩人はトナカイに跨ってもオートバイやスノーモービルを使っても「徒歩旅行者」であるという。「地域芸術祭」をめぐるためにレンタカーを使った現代の訪問者は、はたして「徒歩旅行者」になれるのだろうか。

(1) 車で道に迷う「ものがたり」：清津峡トンネル

2022年7月30日（土）の朝、「越後妻有大地の芸術祭」調査の3回目にしてはじめてレンタカーを借りて回ることにした。前回2018年は早朝の豪雨で電車が遅れバスツアーの出発時間に間に合わず、評判の清津峡「Tunnel of Light」を見逃していた。今回はまずこの清津峡へ行くことに決めていた。トンネル内の700mの道を歩いていくと横道があり、その先は峡谷に開かれている見晴所であった。第二見晴所は白と黒のストライプの模様、第三見晴所には楕円の鏡が一面に貼ってあり、最後の「パノラマステーション」の床に2センチメートルほどの水が張られており、「ウユニ塩湖」のように水面に外の景色が映り込み、そこに立つ人間と景色を一緒に撮影する「映えポイント」となっていた。

初めてのレンタカーは、実にさまざまな不具合が生じ、駐車場に到着したときにはなかなかキーが抜けず途惑った。真夏の日射で熱くなった車に戻ってエンジンをかけようとしたが、反応がない。しばらくしてかかったが2メートル進んだところでストップし、他の車の進路をふさいでしまった。なんとか動き出して、清津峡入口の清津倉庫を目指すことにしたが、カーナビへの入力に失敗したのか倉庫前を気付かずに

通過し、しばらく山中の道を彷徨することになった。すると別ルートが案内され、たどっていくと来るときに通った道に出た。ふたたび清津峡方向に戻ると、その入り口に目的の清津倉庫があった。

インゴルドの狩人は、トナカイやスノーモービルを乗りこなして、獲物の跡をたどる。レンタカーのキーが抜けず、エンジンがストップして他の車に迷惑をかけ、カーナビを使いこなせずに目的地を通過するのは熟練の「徒歩旅行者」とは程遠い。これは親しい人に語る「失敗談」というものがたりの範疇に入るが、しかし、対向車も来ない山中の寂しい道をカーナビに案内されても不安になり、一度通った広い道に出てほっとした。安心したとき、それまでの寂しい道では車のスピードを落としゆっくりと周りを見回し、多少とも周りの環境を「発見」した経験であったと思い返した。

(2) 世間話を「ものがたる」：下条うぶすなの家

7月31日（日）は朝8時過ぎに出発し、川西のナカゴグリーンパークにいった。開場はまだであったが、親子連れが芝生の広場に入り、さまざまな動物の作品をめぐって走り回っていた。「USAKO create」（土橋舞之）は立っている大きな白いウサギ、「祝福」（山田千晶）はピンクの象が座って空に顔を向けている。白いタコが芝生をくねっている「渦」（奥西祥子）。「ねえ、おねがい」（御代将司）は手を合わせて上を見るカワウソ、そして額に1本の角がある耳の大きな白い「もけもけもの」（黒田恵枝）が小屋の柵に2体座っている。とぼけておとなしめな様子がよい。さまざまな動物が広場一面に据えられており、子供がはしゃぎまわっていた。この会場のすぐ近くにあるジェームス・タレルの有名な「光りの家」に行ったがまだ開場前で、閉鎖された入口から数組が戻ってきてい

た。ナカゴグリーンパークを通して車で10分ほどのところにある屋外の作品を2点見て、毎回訪ねている下条のうぶすなの家に向かった。

11時の開場までだいぶ時間があったので、その先の2021年に逝去した古郡弘の作品「胞衣（えな）—みしゃぐち」（2006年制作）を見にいった。木々の緑が深く、向かいの山からはうぐいすの声が聞こえる村の道を登っていくと、道のわきに黄色の看板だけがかった。とりあえず丘の上に伸びている細い道を行くと、3メートルほどの土の壁に挟まれた通路があり、その中を進むと広場に出る。木も何本か植わっている。「地元の住民とともに古材を組み上げ、土を固めて壁を築きあげられた大きな空間は、胎児を守る……胎盤」ということであつた。そこをぐるりと回ると、入り口に「排出」された。そこからうぶすなの家に戻ると10時半を過ぎていた。

ほかに客はいず、開場前だが入れてもらい、靴を脱ぎ、汗をぬぐいながら1階に展示されている作品を見た。戻ると年配の女性が2階の「うぶすなの白」の作家・布施知子の制作の様子を話してくれた。雪の降る日に作家がここに来て、精霊のようなものに対する尊敬を、白い紙を折ることで表しているという。アトリエで制作したものをただ持ちこんだわけではないことを強調していた。2階の薄暗い部屋に白い大きな円錐形の紙が三つ置かれ、そのまわりに10cmほどの三角形をいくつか合わせた雪の結晶のようなものが曲線を描いて並べられている。隣の部屋には無数の小さな緑色、鶯色、青色の紙に包まれ上で結ばれた立方体が色ごとの3群になって並んで置かれていた。そして次の暗い部屋には白い大きな扇をS字型にしたものが二組並べられており、天井から円錐を二つ合わせた白い紙の紡錘が吊り下がっており、部屋の隅にある階段筆筒には大きな円錐が4つ並んでいた。

一階にもどって、「ばあばの味噌キーマカレー」(1500円)を頼んだ。接待役の年配の女性から「味はどうですか」と聞かれたが、暑い所を歩いた後なので少し塩気が足りないと答えると、参考にさせてもらうとの返事があった。食事をとっている間、そのシニアボランティアの女性は、自分の家のことを語った。何人か客が入ってきており、その世間話は一人の客に語られるということでもなく、中に入ってきた客全員へのパフォーマンスとして提供されていた。今彼女の家では毎晩大騒ぎで、タヌキとハクビシンが争っていて大変だという。また、タヌキは獲物をとるために木を倒してしまうが、ハクビシンは木に登って獲物をすっかり食べてしまう。「どちらがしまつがよいですか?」という質問に、タヌキは畏によくかかると答えていた。客が多くなると、誰に話すというわけでもなく、自分に向けられた視線にその都度対応する。世間話のように「ものがたる」対応であった。

(3) 食べ物の「ものがたり」を上演する：上郷クローヴ座

これまで長いあいだ気になっていても行けなかった津南町の上郷クローヴ座を訪ねることにした。正午少し前に道路のすぐ側にある廃校跡を利用した上郷クローヴ座に到着した。大きな玄関で靴を脱ぎスリッパに履き替えると、受付がある。そこで芸術祭のパスポートに判を押してもらつつもりだったが、「予約をしていますか」と聞かれた。いいえと答えると、さらに「食事をしますか」と聞かれ、思わず「お願いします」と答えた。昼食をどこかで取るつもりであったので、好都合であった。上演される「銀河鉄道 北越雪譜」の鑑賞と食事代として2500円を払った。教室の入口にはすでに20数名ほどが並んでおり、すぐに開場時間になって中に案内された。

内された。

小学校高学年用の机が2列ずつ向かい合って4列並んでおり、各自の机の上には木製の平たい箱が置かれ、その蓋の上には「お品書き」の紙が載せられていた。二人のもんぺ姿の女性が台本を手にして登場し、台詞を読み上げ始めた。反対側の壁には銀河鉄道のイラスト映像が流れた。この芸術祭で食べものをパフォーマンスとともに提供している「EAT & ART TARO」の演出による上演である。映像が終了すると暗幕が開かれた。弁当箱の蓋を開けて「夏野菜のマリネ」を食べるように言われ、オクラ・トマト・ミョウガ・タマネギ・サーモンのマリネの説明を受けた。それらを食べ終わると、次はとうもろこしととうもろこしのスープで、食材は津南の朝取れであることがアピールされた。

次にズッキーニにまつわる説明／上演があった。櫓に乗った大きな発泡スチロールの塊の中央の穴から、黄色と白の扁平なズッキーニが出てきた。それを両手に持って飛ぶように動かし、「これは何でしょう」と尋ねた。何人かから回答があり、いくつかの不正解のあと、「UFO!」と答える人がいた。正解であった。その「UFOズッキーニ」と糸瓜のホイル焼きの説明があった。次にお盆に乗せた「津南ローストポーク」が運ばれてきた。ポークをこの一座の名前にもなっている名産のクローヴでマリネしてローストしたものに、津南の長ネギが添えてある。そして津南のコシヒカリで作られた「最高のおにぎり」と漬物が運ばれてきた。おにぎり・ポーク・漬物はお代わりができた。漬物が売られているならみやげにしたいと思って尋ねた人が何人かいた。調理場で確かめた後、ここで漬けているだけだと答え、漬けるとき酢を少し入れるのがコツだと説明していた。

ここではそれぞれの食材の説明のための「ものがたり」が上演された。おにぎりに関しては、

重い荷物を担いで十日町までの遠い道のりをたどる人がおにぎりを食べようとする、腹を減らした毛むくじゃらな怪物がそれを欲しがった。分けてやると、お礼に重たい荷物を背負ってくれたというものがたりであった。そして最後には、村人が山で寒くて震えていると、クマが来て、クマの持っている甘い「アリの汁」をもらったというものがたりが上演され、デザートとして「雪下人參ゼリー」とクローヴの香りをつけた甘いティーが配膳された。すべての食事が終了した後に、駅長帽をかぶった4人の女性が登場し、最後の挨拶の台詞を分けて述べ、「万歳」を三唱して終了した。

(4) 「奇跡のモノ」のものがたり：アーティストの語り

2022年8月27日開催された長野県大町市での「原始感覚美術祭」では、原子力発電に抗議する科学者と福島いわき市で被災したアーティストの「ものがたり」に触れた。これまで見て聞いても実感として湧くことのなかった原子力発電の問題点と津波による被害についての具体的なものがたりによって、11年経過したいまでも明確な像が結ばれることを実感した。原発を廃止しなければならないとずっと訴え続けている科学者・小出裕章と、津波による原発事故の被害者として原告となって地域の人々のためにできることを継続しているアーティスト・安藤栄作の姿であった。

小出は、福島の「原子力緊急事態宣言」は11年経っても解除されない、実は100年経っても解除できないものなのだと説明する。福島の原子力発電所からの放射能の量は、広島原子爆弾の放射能の168発分であり、そこは「水を飲むな、トイレを使うな、食べるな、眠るな」と生命維持のための日常的な行為が禁止されるレベルの危険な場所であり、その異常な事態が

いまだに継続していると語る。若い頃原子力に夢を賭けて大学で勉強をはじめたが、それは最大の誤りであった。自分で落とし前をつける以外にない。そしていままた原子力発電を再開しようとする動きがあるが、なんとしても「原子力だけは止めなければならない」と訴えた。

その話のあとで、彫刻家・安藤栄作が「奇跡のモノ」のものがたりを語った。2011年3月11日はいわき市の自宅から家族全員で内陸のショッピングセンターに出かけた。地震の時は、その建物が3分間も揺れた。建物自体は大丈夫だったが、「原発は？ 家に残してきた犬ユイは大丈夫か」と思いつつも、太平洋岸から離れてそのまま反対側の新潟に避難した。3週間後に津波被害に遭った自宅を見に行ったが、家は流され、ユイもいなかった。娘の部屋の屋根と500点はあった作品の一つだけが残っていた。菓子箱があり、そのなかに娘の着せ替え人形と洋服がきれいに残っていた。遠くの瓦礫の上に3歳の時の息子に作った木の自動車が残っていた。そして地区の人たちがお参りをしていた小さな社が、周りの囲いは流されて無くなっていたが、そのまま奇跡的に残っていた。「もっともか弱いのが、真心が形になったものが残っている」。すごい地震の振動で、多次元の入り乱れた空間に晒されたなかでも意外に小さなものが残った。「もっとも強いのが、真心だ。それが基軸だと思う」と語る。

2013年11月に、知り合いのアーティスト25人と「光の降りる時代・25Spirits」を大阪の画廊で開催することになった。被災地いわきで活動を続ける作家12名と関西から被災地に想いをこめて続ける作家10名、そして震災後いわきから関西に避難した作家3名によるコラボレーション展であった。版画家ノブコ・ウエダには初めて声をかけたが、その時「奇跡」が起こった。彼女は震災後現地に行って1500枚以上の

写真を撮り、中から10数枚を選んで版画作品にしていた。作品が搬入されるまで展示内容をまったく知らなかったが、彼女が展示した作品の4枚が、津波で崩壊した安藤家の娘の部屋の屋根であった。ノブコ・ウエダも作品の対象になった家の主に出会ったら作品を進呈しようと考えていたという。作品は「奇跡的に残ったモノ」の「ものがたり」とともに家主のもとに「戻ってきた」のであった。

おわりに

「ものがたり」(ナラティヴ)は、語られる内容だけではなく語り手についても語る。本論で扱った「ものがたり」(ナラティヴ)は、地域の「生活者」のライン(足跡)と「徒歩旅行者」(または狩人)がたどるラインが交わる場所に生成していた。松木が言うように、ナラティヴとは書き言葉や話し言葉を含め、世界各地の人々の視点からの「イーミックなディスコース」を広範に包摂する領域である。本論では、現代の「旅／観光」における「ものがたり」に注目し、観光みやげに表象される観光経験のものがたりを明らかにした。ブルーナーは「導きのナラティヴ(ものがたり)に秩序づけられなければ、それ自体不完全な存在」になると指摘したが、「よく知られたものを確認するだけ」の大衆観光者に「観光の枠組み」を提供しているのは観光ガイドであった。しかし本論で強調したのは、地域の物語を発見する「地域文化観光者」の姿である。地域の生活者との交流を通して人々の紡ぐ「ものがたり」・人々が刻み込んだ網細工(メッシュワーク)のような足跡をたどる「徒歩旅行者」が、「ラインが示すものがたり」をたどる今日の「旅人／観光者」である。

後半では、現代の生活者が刻み込んだ「観光まちづくり」や、アーティストと地域の人々が

織りなす「地域芸術祭」の具体的な例を「ものがたり」の視点から分析した。「観光まちづくり」の事例としてはものがたり観光の代表的な「語りの里・遠野」、「まち旅」の80ものコースを「6章のものがたり」として提供する「久留米まち旅博覧会」を取り上げた。「地域芸術祭」のものがたりでは、世間話を「ものがたる」うぶすなの家の接待パフォーマンス、そして食べ物の「ものがたり」を上演する上郷クローヴ座、最後に東日本大震災で流されたアーティストの家の「奇跡のモノのものがたり」を取り上げた。ものがたり(ナラティヴ)をたどる「旅人／観光者」がいかに地域の「生活者」の足跡(ライン)を歩き・体感し、それを自らの「知」としていくかを明らかにすることこそが、これからの「地域文化観光(旅／観光)」にとって必要であることを実感した。語りでは、示された内容だけではなく、語る声や間、語り手と聞き手とのやりとりなどによって、伝わるものが異なってくる。その意味で演劇性に注目し、演じる者と観る者、そしてその両者の関係性を現代の錯綜する社会的・政治的諸関係のただ中において考察する必要があることを、この事例はものがたっていた。

(本論後半部分の事例は調査報告の段階で終わっているが、今後、査読者からのご指摘のあったように、「地域文化観光者」がどのような物語を発見するのかそのプロセスに注目した分析を試みたいと思う。)

参考文献

- インゴルド、ティム(2014)『ラインズ 一線の文化史—』工藤晋訳 左右社
- 川森博司(2001)「現代日本における観光と地域社会 ふるさと観光の担い手たち」『民族学研究』No.66-1 pp.68-86
- 橋本和也(2011)『観光経験の人類学 みやげものガイドの「ものがたり」をめぐって』世界思想

- 社
- (2022)『旅と観光の人類学——「歩くこと」をめぐって』新曜社
- ブルーナー、エドワード・M (2007)『観光と文化——旅の民族誌』安村克己・遠藤英樹他訳 学文社
- 松木啓子 (2002)「ナラティブ」『文化人類学最新述語 100』綾部恒夫編 弘文堂 pp.138-139
- Edensor, Tim (2016) 'Walking Through Ruins' in *Ways of Walking Ethnography and Practice on Foot* ed. by Tim Ingold and Jo Lee Vergunst Routledge London and New York pp.123-141
- Ingold, Tim (2016) Introduction in *Ways of Walking Ethnography and Practice on Foot* ed. by Tim Ingold and Jo Lee Vergunst Routledge London and New York pp.1-19
- Ingold, Tim and Vergunst, Jo Lee (2016) *Ways of Walking Ethnography and Practice on Foot* Routledge London and New York
- Kwon, Heonik (1998) 'The saddle and the sledge: hunting as comparative narrative in Siberia and beyond', *Journal of the Royal Anthropological Institute* (N.S), 4:115-127
- Legat, Allice (2016) 'Walking Stories; Leaving Footprints' in *Ways of Walking Ethnography and Practice on Foot* ed. by Tim Ingold and Jo Lee Vergunst. Routledge London and New York pp.35-49.
- Olwig, Kenneth (2016) 'Performing on the Landscape versus Doing Landscape: Perambulatory Practice, Sight and the Sense of Belonging' in *Ways of Walking Ethnography and Practice on Foot* ed. by Tim Ingold and Jo Lee Vergunst Routledge London and New York pp.81-91
- Orlove, B. (2002) *Lines in the Water: Native and Culture at Lake Titicaca*, Berkeley, CA: University of California Press.
- Tuck-Po, Lye (2016) 'Before a Step Too Far: Walking with Batek Hunter-Gatherers in the Forests of Pahang, Malaysia' in *Ways of Walking Ethnography and Practice on Foot* ed. by Tim Ingold and Jo Lee Vergunst Routledge London and New York pp.21-34

<要旨>

観光における「ものがたり」の研究

橋本和也

観光における「ものがたり」を「ナラティブ研究」の成果から分析する。観光者は出発前にあらかじめ提供されたものがたりをなぞるだけであり、観光中のまなざしもすでに設定された枠組みの中でしか焦点を結ばない。観光のナラティブは観光経験に枠組み（フレーム）を提供する。それゆえ「よく知られたものを確認」するだけの大衆観光者が新たに「何かを発見すること」を期待することは困難である。しかしながら本論では、インゴルドの提唱する「狩人」のように、人間や非人間が描く「足跡／ライン」をたどる「徒歩旅行者」の「歩き方」を参照し、地域に「住まう者」の「ものがたり」をたどる「地域文化観光者」の「歩き方」を提案する。取り上げる「地域文化観光」の対象は、「観光まちづくり」の先進的地域であり、かつ「ものがたり観光」の代表的な事例といえる「語りの里・遠野」と、毎年秋に「6章80のまち旅」を提供している「久留米まち旅博覧会」、そして筆者が2014年以來調査研究している日本各地の「地域芸術祭」である。これらの事例から、観光におけるナラティブ研究とは筋のある「ストーリー作品」だけが対象となるのではなく、観光に関わる全ての人間や非人間の物語がいかに「語り／語られる」かに焦点をあてる研究であるということを示す。

キーワード：ナラティブ、観光の枠組み（フレーム）、徒歩旅行者

< 英文要旨 >

A Study on Tourism Narrative

Kazuya HASHIMOTO

This essay focuses on the tourism narrative. The tourists trace the narrative presented by the tourism brochures, magazines, agents or TV etc., and even in the middle of sightseeing their gaze falls only on the well-known things. The tourism narrative gives a frame to tourism experiences. It is very difficult for the mass-tourists who only ascertain the well-known things to find out something new. Nevertheless in this essay, for the mass-tourists to become genuine travelers, I propose a way of walking of hunters that T. Ingold described. As the hunters trace the footprints of animals, the wayfaring travelers trace the landscape of inhabitants or a tapestry within which their own lives are interwoven. Here I introduce the advanced cases of “Kankō Machi-tsukuri” (community development through tourism) of Tōno and Kurume cities, and the narrative performances shown at the Local Art Festivals in Niigata prefecture. I will clarify that the study on tourism narrative is to focus on how to tell the stories of human and non-human or be told.

Key words : narrative, tourism framework, wayfaring traveler

